

「震災は忘れたころにやってくる」

今年の夏は移動制限のない夏休みだったが、これまで以上の感染者数となり、何事も自由とはいえない夏休みだった。こうした中、東北地方では洪水により避難生活を余儀なくされている人々もいる。私たちもいつ、いかなるときに災害にあるかもしれない。防災の日を前に新聞部員が神戸の震災記念館を訪れた。その内容を紹介したい。



阪神淡路震災直後には高速道路が崩れた＝神戸新聞ホームページより

日頃の震災対策を

9月1日は防災の日です。今回は災害について取り上げたいと思います。山梨県では過去に様々な自然災害が起こっています。例えば、2016年には大雪により孤立してしまう地域が出てしまったり、2011年には台風11号、12号の影響によりライフラインが確保出来なくなるといった被害の報告が挙げられた地域もあつたそうです。また、自然災害の中には地震など様々あり、私たちは対策をしなければなりません。

神戸震災後を訪ねて

私は兵庫県にある「人と未来防災センター」(神戸

市)というところを訪ねました。兵庫県では1995年1月17日の午前5時46分に阪神・淡路大震災というマグニチュード7.3の大规模な地震が起こりました。当時の人にお話を伺うと「当時は祝日明けで何気ない日常を過ごしていました。しかし阪神・淡路大震災が起こったことで1995年1月17日は私たちのような被害を受けた人達にとって忘れられない日となりました。地震が起こってすぐ瓦礫の下に埋もれ意識を失ってしまいました。少しして目が覚めると自分が置かれている今の状況を少しずつ整理しました。火の手が近づいているという声も聞こえるため何とか逃げなければいけないと思いました。なかなか助けも来ずうだめかと考えたこともありましたが、私は生きることと諦めませんでした。生きることに執着し瓦礫に埋められてから2時間後私は運良く物置き場をかしっていた人に発見され救助されました。」と力強く話してくださいました。また、「助けてくれた人や救助に携わってくれた人には感謝しかない」とも話してくださいました。

この方は助かることが出来ましたが阪神・淡路大震災では6434人の方がなくなりこのうちの77%の方が瓦礫の下に挟まれるなどによる圧死、7%の方が木造建築などが多くその火災などによる焼死だったそうです。阪神・淡路大震災では火災の被害が多く出ました。この阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、兵庫県では様々な対策が行われていました。兵庫県では山梨県と大きく異なる点があります。それは海があることです。そのため学校や地域で行われる避難訓練では「遠くに逃げるのではなく高いところに逃げる」ということを必ず教えられるそうです。また、地震に遭う場所

日頃からの対策を

都留高校のまわりは山が多く最も想定しやすい被害は土砂災害です。食糧を3日分リュックサックに入れた1人1個用意することが大切だそうです。また、災害時混乱が起こるため普段の避難訓練からその状況を想定し素早く正確な判断をすることも大切です。一人ひとりが防災について改めて考え、災害が起こった時に自らの命を守るようにしていきたいでしょう。(小)

高校生議会

生徒会長の佐藤はなさんが8月2日行われた高校生議会に参加し「高校生の部活のあり方」について提言を発表しました。そこで佐藤さんに終えてみての感想をお聞きました。

「県議会に参加し、実際に県の将来などについての県内の高校生の提言を聞き、また自分自身も事前に提言内容を考え提言を行ってきました。

この県議会へ参加したことで山梨の課題や将来についてなどを深く考え、またその考えを他の高校生の提言を聞くことができたので良かったです。

これから、私たちの世代が県の未来、また日本の未来についてよく考え、行動していくことがとても必要だと感じました。」



自学進取

今年は移動制限なしの夏休みということであつたが、新型コロナウイルスの感染状況をみれば、自由に何でも行動できるというわけにはいかない。とにかくストレスだ。このほどアンデシュ・ハンセン著『ストレス脳』(新潮新書)を読んだ。作者は『スマホ脳』でベストセラーになった精神科医である。人類の歴史から脳の構造を解説し、現代社会がどうしてストレスを抱え、「うつ」の患者が多いのかを説明する。このうち、10の最も重要な気づきを抜粋したい。「不安とうつはたいていの場合、防御メカニズムである。どちらも人間の本来の性質として正常であり、あなたが壊れているとか病気ではない」「運動はうつや不安からあなたを守ってくれる」「孤独はいくつもの病気に影響するが、小さな努力が大きな違いを生む。健康の見地からは、親しい友達が数人のほうが、浅い知人が多くいるよりも良いと思われる」などなど。コロナ禍でのオンライン授業はこの本からは最も「うつ」のリスクを生みやすいということになる。対面での授業を通しての皮膚感覚での人との触れ合い、徒歩や体育の授業での適度な運動はオンラインでは味わえない。コロナ禍となつて2年半がまもなく過ぎようとしている。そろそろ元に戻りたい。

第29回 ”吹奏楽定期演奏会開催”

7月31日(日)に大月市民会館で、吹奏楽部の定期演奏会が行われた。コロナ禍で不安がありながらも、「限界突破」というスローガンを掲げ、諦めず日々努力してきた吹奏楽部の演奏は、柔らかくも迫力のある、透き通った音楽で会場を包み込んだ。

都留高校吹奏楽部は、3年生6名、2年生7名、1



定期演奏会の様子

年生5名に加え、顧問の堀内先生、副顧問の矢崎先生、計20名で活動している。人数は決して多くはないが、部員全員で支えあい、協力しながら主体的に練習に励んでいる。その努力が実り、今年7月には山梨県吹奏楽コンクールでは金賞を受賞し、9月に新潟県で行われる西関東大会への出場権を獲得した。

定期演奏会はウエルカムコンサートを経て、第1部が始まった。第1部はアン

サンプル&コンクルーステージである。数々の賞を獲得している演奏は、音楽に引き込まれるような感覚を味わった。一人ひとりの音を大切にしながら、きれいなハーモニーを奏でる。吹奏楽部の仲の良さも表れていた。第2部はポップステージだ。第1部とは一変し、会場が明るい雰囲気になった。たくさんの楽器のソロもとても印象的だった。野球応援特集では、チアリーダーも登場し、とても盛り上がった。野球部の熱い戦いが再び思い出されるようだった。そしてアンコール。先生方も登場し、宝島で幕を閉じた。時間があつという間に過ぎていった。

できたことに対し、「関わってくれたすべての人に感謝している。」と言っていた。西関東大会に向け、「人数が多い学校に勝ち、手にした切符なので、このまま気合を入れ頑張っていきたい。」と意気込みを話してくれた。学年関係なく仲がいいという強みを生かし、これからも吹奏楽部は成長し続けるだろう。(あ)



定期演奏会のあとインタビューに答えてくれた小川部長

今注目の人

小嶋大蒼さん

今回は水泳部で全国ジュニアオリンピックク(JOC)に出場する2年3組



水泳部に所属する小嶋大蒼さん

小嶋大蒼さんに意気込みを聞きました。(8月18日取材)

Q、いつから水泳を始めたか?

A、(幼稚園の)年中の頃から始めました。

Q、水泳を始めたきっかけは何ですか?

A、親の勧めで始めて泳げるようになればいいかなという気持ちで始めました。

Q、どのくらいの頻度で泳いでいますか?

A、泳ぐのが好きなのでほとんど毎日泳いでいま

す。

Q、どこで水泳をしていますか?

A、初めはブルーアース河口湖というスイミングスクールで水泳をしていて、その後強いクラブチームへ行き、水泳を続けたくて都留高校に来ました。

Q、日々の練習で意識していることは?

A、誰よりも練習を頑張ることです。

Q、練習はきついんですか? また誰の練習メニューがきついんですか?

A、練習はきついんです。

陸上だと大村先生で水中央だと文太先生がきついんです。

Q、今後の目標は何ですか?

A、来年、もう一度JOCに出場して、インターハイと国体にも出場したいと思っています。

Q、全国大会に向けて、一言お願いします。

A、全国大会では200mのクロールで出場します。関東大会でいい結果を残せなかったのが、その悔しさをバネに決勝に残りたいです!

甲子園に出場したときの記事は

シリーズ都留高新聞の歴史②

昭和27年10月24日(金)に発行された第22号では甲子園に出場した記録が掲載されている。見出しに「栄冠我に輝けり延々四時間の熱戦」とあり、県大会決勝で1対2で敗れたのち、当時行われていた山静大会で静商に2対1で勝ち、「甲子園の全国大会に駒を進めることになった」とある。

甲子園における記録としては「矢頭投手は打者の手でホップする伸びのある速球と大きく割れるドロップで会心のピッチングを示し四回まで水戸商を3人ずつ片付ける一方、攻撃でも



昭和27年10月24日の1面

二、三回二死ながら二、三塁と再三の得点機を迎え水戸商を完全に押しながら決定打を欠いて得点出来ず五回水戸商は加倉井のデキサス、高畑の内野安打の小野の併殺球を柳田が二塁に悪投して得点を許し、更にスクイズで追加点を加えられ六回にも一点を追加され矢頭の好投むなしく惜敗した。」と詳細が書かれている。

矢頭選手はウィキペディアには、「高校卒業後は立教大学へ進学し野手へ転向。東京六大学リーグで優勝を経験する。4年生時には主将を務めた。1957年に大映ユニオンズに入団、1年目から中堅手のレギュラーを獲得する。」とある。

「総文祭に参加して」

8月1日から3日にかけて開催された、第46回全国高等学校総合文化祭東京大会に参加しました。一昨年は新型コロナウイルス感染症のためオンライン開催となりました。今年は無事開催されましたが、新型コロナウイルス第7波のピークである期間に行われました。大会での挨拶の中に、「本当に開催するのか、できるのか」という声もあったとお話ししていました。そこで、本大会の振り返りと共に、大会に参加して感じた事を書こ

うと思います。

本大会の新聞部門は、大会テーマである「江戸の街光織りなす文化の花」のもと、各班に分かれて交流し、新聞作成をしました。同じ班になったのは北海道、岩

ます。新聞作成では、各々のアイデアを持ち合わせてスムーズに進める事ができました。

3日間の交流を通して、新聞を作る、という事に今まで以上に責任と誇りを持つようになりました。そして、全国の高校生と交流する事で、自分の視野が広がり、同じように頑張っている仲間がこんなにもいるのか、と実感することができました。これからの気持ちは忘れる事なく、一杯頑張っていきたいと思いました。(竹)